Research Monograph Series

座・席・位相の生成論
空・即・是・非による印・型・形・無名性・文化生成の統一理論

Generative Theory of Za, Seki, and Topology:

A Unified Theory of Mark, Kata, Form, Namelessness, and Cultural Generation through Emptiness, Soku, Provisional Affirmation, and Differential Negation

Author: Tomokazu Tanaka (bigakusha-haha)
ORCID: https://orcid.org/0009-0009-3796-5889
Affiliation: Sayama Aesthetics School / Institute of Aesthetics
Version: 1.0
Last Updated: July 2026
Status: Ongoing Research

Research Monograph
Tomokazu Tanaka (bigakusha-haha)
Version 1.0, July 2026

Publication Information

Copyright

© 2026 Tomokazu Tanaka (bigakusha-haha). All rights reserved.

License

This work is distributed as a Research Monograph.

No part of this publication may be reproduced, distributed, or transmitted in any form or by any means without prior written permission of the author, except for brief quotations used in academic review or scholarly citation.

Suggested Citation

Tanaka, Tomokazu (bigakusha-haha). 2026.

Generative Theory of Za, Seki, and Topology:
A Unified Theory of Mark, Kata, Form, Namelessness, and Cultural Generation through Emptiness, Soku, Provisional Affirmation, and Differential Negation

Research Monograph Series, Version 1.0.

Sayama Aesthetics School / Institute of Aesthetics.

Research Monograph

Version: 1.0

Last Updated: July 2026

Status: Ongoing Research

要旨

本論文の目的は、美学者母が生成学の内部で展開してきた印、型、形、座、位、無名性、文化生成の概念系列を、「席」という局所的インターフェイスの導入によって精密化し、さらに空、即、相、是、非を系列とは異なる論理階層に位置づけることで、統一的な存在生成論として提示することにある。

本論文は、存在を固定的実体ではなく、自己・他者・環境の相互作用から生成する位相的構造として捉える生成の位相存在論を基礎とする。そのうえで、存在生成の持続と文化的継承を記述する基本系列を、「印 -> 型 -> 形 -> 座 -> 席 -> 位 -> 無名性 -> 文化生成」として定式化する。印は差異を現実へ刻む最小の契機、型は印の反復可能性を保持する非固定的構造、形は型が個別具体的な現実に現象した可感的構成、座は複数の参与可能性を歴史的・共同的に組織する関係構造、席は座が一つの身体や行為を迎え入れるために局所化した空所、位は身体が席に即することによって生成される暫定的な関係的位置、無名性は生成が特定の作者や所有者へ回収されず継承可能になる存在様態、文化生成はその反復が個人を超えて持続する過程である。

ただし、この系列は単純な時間的順序でも不可逆的な発展段階でもない。空は系列全体を固定的本質へ閉じさせない根本条件であり、即は、各段階において異質な位相を差異のまま接続し、現実化を可能にする生成的接続構造である。相は、ある位が成立したときに自己・他者・環境の関係全体が現す構成様態であり、位と相の不可分な相互生成が位相を形成する。是は、即によって生じた関係が「これである」として指示・共有・反復可能になる二次的かつ暫定的な現成作用である。非は、その是を消去するのではなく、固定的同一性から解放し、個別具体的な現実へ再び開く差異化作用である。

本論文は、この体系を般若思想における色・空・即是・即非、ハイデガーの世界内存在および世界性、西田幾多郎の場所、ならびに西谷啓治の空の場との比較において検討する。同時に、仏教概念、ハイデガー存在論、京都学派を生成学へ安易に同一化することを避ける。補助的考察として、色気を、形が空を保持しながら他者の参与へ席を開く関係力と定義し、系列の追加段階から区別する。美学者母の理論の独自性は、空を個別具体的な参与可能性へ局所化する「席」と、そこで生じた出来事を位相変換へ導く「即」の理論にある。最終的に本論文は、生成学を、存在の関係性を記述するだけでなく、その関係がいかに印となり、型と形を経て座と席を開き、位相を生み、無名の文化として継承されるかを説明する理論として確立する。

キーワード

生成学；生成の位相存在論；印；型；形；座；席；位；相；位相；空；即；是；非；無名性；文化生成；世界内存在；インターフェイス存在論

目次

Contents

0. 方法論的覚書 1

1. 実体から生成へ 3

2. 印から文化生成へ 4

3. 系列を貫く条件と作用 7

4. 線形系列ではなく再帰的生成 10

5. 仏教思想との比較 11

6. ハイデガーとの比較 13

7. 西田・西谷との比較と生成学の独自性 15

8. 美学者母の既存理論との統合 16

9. 民宿狭山美学校という実践 18

10. 統一命題 19

11. 理論的意義と限界 21

結論 22

参考文献 23

方法論的声明 25

0. 方法論的覚書

0.1 本論文の位置

生成学は、存在、芸術、人工知能、言語、制度、資本、文化を、それぞれ孤立した対象領域として扱うのではなく、それらがいかなる関係と条件のもとで生成するのかを横断的に研究する学問である。生成の位相存在論は、その基礎理論として、存在を固定的対象ではなく、関係の接続可能性から現象する位相的構造として定義する。

本論文は、この基礎存在論に対して別の公理系を追加するものではない。むしろ、『生成の位相存在論の公理系』、『自己外部化の限界と存在生成』、『人間以前性と自己以前性』、『言語デリバティブ論』、『評価・証明・価値の力学』、『型の存在論』、『無名性の存在論』、『生活即芸術の存在論』、『力の生成論』に分散していた生成、接続、反復、現実接地、継承の問題を、一つの概念建築として統合するものである。

とりわけ、『人間以前性と自己以前性』は、自己外部化論と言語デリバティブ論のあいだに置かれる中核的研究である。人間以前性は、人間的意味づけや制度に先立ちながら現在も人間を生成し続ける自然の普遍性を指す。自己以前性は、社会的・記号的に固定された自己像に先立ちながら、現在も固有の感覚、判断、指向性、創造可能性として自己を生成し続ける個別具体的普遍性を指す。本論文における即は、この人間以前性と自己以前性が、身体と環境の抵抗を通じて接触する局面を記述する。

0.2 系列と作用の区別

本論文が採用する中心的な方法論は、系列を構成する項と、その系列を成立させる条件・作用を区別することである。

系列を構成する項は、次の通りである。

印 -> 型 -> 形 -> 座 -> 席 -> 位 -> 無名性 -> 文化生成

これに対して、空、即、相、是、非は同じ列に追加されない。

- 空は、系列全体を開いたままにする根本条件である。
- 即は、差異を保持したまま異質な位相を生成的に接続する構造である。
- 相は、位とともに位相を形成する関係様態である。
- 是は、即から位相への移行に伴う暫定的成立である。
- 非は、成立した是を固定的同一性から解放する差異化作用である。

したがって、「座 -> 席 -> 即 -> 是 -> 位 -> 相」という直線的配列は採用しない。即は一段階ではなく、座と席、席と身体、位と相、個人と文化のあいだを作動させる。是も一段階ではなく、即によって生じた関係が、特定の座において一つの位相として暫定的に現成する二次的作用である。非もまた新しい段階ではなく、その暫定的成立が本質化・制度化されるときに、現実の抵抗を通じて再開放する作用である。

0.3 語の分解に関する注意

本論文は、「位相」を位と相へ、「即是」を即と是へ、「即非」を即と非へ分けて理論的に読む。しかし、この操作は数学、梵語、漢訳仏典、古典中国語の語源をそのまま再現するものではない。位相の数学的定義は開集合、近傍、連続性などによって与えられ、漢訳仏典の即是は文法上まとまりをもつ。したがって、本論文の分解は、既存語の語源的真理を主張するものではなく、生成学の内部で関係生成を記述するための方法論的・解釈学的操作である。

1. 実体から生成へ

1.1 関係の先行性

従来の存在論は、存在者がまずあり、その後に存在者間の関係が成立すると考えやすい。これに対して生成の位相存在論は、関係が存在者に先行すると主張する。ここで先行とは時間的に先に存在することではなく、存在者が存在者として現れるための成立条件であることを意味する。

身体は、世界から切り離された完成済みの主体ではない。身体、他者、道具、建築、自然、言語、制度が相互に応答するなかで、自己と世界が同時に分節化される。存在とは、この分節化の結果として現れる局所的で暫定的な位相である。

1.2 現実とインターフェイス

生成学における現実とは、単なる物理世界でも客観的事実でもない。現実とは、生成した関係がそれ以上別の記号へ完全には還元できず、身体、物質、時間、他者の抵抗として不可逆性をもつ位相である。

インターフェイスは、すでに成立した主体と客体を後から接続する中立的装置ではない。異なる位相が接触し、それ以前には存在しなかった関係を生成する境界である。席は、このインターフェイスの最小かつ身体的な形態として位置づけられる。

1.3 人間以前性と自己以前性

生成は人間的意味づけから始まらない。自然、物質、身体、時間、気候、地形、生態、偶然は、人間がそれらを説明する以前から働き、現在も人間の行為を生成している。この次元が人間以前性である。

同様に、自己は社会的肩書、評価、言語的自己像から始まらない。既存の自己像に回収されない感覚、違和感、身振り、指向性、創造可能性が現在の自己を生成し続ける。この次元が自己以前性である。

即とは、自己以前性と人間以前性が現実の抵抗を介して接続され、一つの行為や関係が生成可能になる接続構造である。したがって即は、内面の直接的表出でも、無媒介な主観性でもない。それは自己と自己以外が互いに変形される現実接地の出来事である。

2. 印から文化生成へ

2.1 印：差異の最小の現実化

印は、既成の記号体系に属する意味単位ではない。印とは、身体や行為が自己以外へ触れ、その接触が差異として現実に残る最小の契機である。足跡、傷、線、声、配置、反復された身振り、しめ縄、グラフィティ、Web上の操作、生活空間の変更は、いずれも印となりうる。

印は作者の内面を外部へ写す表現ではない。印をつける行為によって、行為者、対象、環境の関係が変わる。したがって印は、自己外部化の結果であると同時に、自己が自己以外との関係から生成し直される契機でもある。

印は生成を開始するが、その意味を完成させない。印が何であるかは、後続する反復、応答、解釈、物質的変化によって遡及的に決まる。この非完結性が、印を単なる符号から生成契機へ変える。

2.2 型：反復可能性の保持

型は固定された規則や模範ではない。型とは、印の差異を消去せずに、行為を反復・変奏・継承できるようにする生成構造である。型がまったく固定されなければ反復は成立せず、完全に固定されれば新しい生成は起こらない。したがって型は、同一性と差異、保存と変形のあいだに成立する。

型は個人の意図を超えて作用する。誰かが始めた行為が反復されるとき、後続者は創始者の内面を再現するのではなく、型が保持する接続可能性へ参加する。ここで反復は複製ではなく、現実条件の差異を通じた再生成である。

2.3 形：型の個別具体的現象

形は、型が特定の素材、身体、時間、環境に即して現れた個別具体的な構成である。同じ型から複数の形が生じ、同じ形も異なる座に置かれれば異なる相を現す。

形は完成物ではない。形は次の関係を誘発するインターフェイスである。芸術作品を固定的対象としてではなく存在生成の条件として捉える作品性の理論は、この点に成立する。作品性とは物が作品であるという属性ではなく、形が自己・他者・環境の関係を持続的に生成する力である。

2.4 座：共同的生成構造

座は、単なる物理的位置や一個の席ではない。座とは、複数の参与可能性、型、規則、距離、方向、応答、時間の蓄積を組織する共同的な関係構造である。場が時間と出来事の蓄積を強調する概念であるなら、座は、その場において誰がどのように参加し、応答し、交代し、継承しうるかを構造化する。

日本史における座は、宗教的・儀礼的な席、同業者集団、商工業者の共同組織など、参与資格と共同的権利を組織する制度として展開した。この歴史的座を生成学の座へ直接還元することはできないが、座が単なる空間ではなく、席をもつ権利、参加の境界、役割、反復を組織したという点は重要である。

従来、座を「構造化された空位」と表現してきたが、席の導入によって定義を精密化できる。座そのものが一つの空位なのではない。座は、複数の席と空位を関係づけ、それらのあいだに参与可能性を形成する構造である。

2.5 席：空の局所化と身体的インターフェイス

席は、椅子という物体に限定されない。席とは、座が一つの身体、行為、存在を迎え入れるために局所化した参与可能性である。席は座の部分であるが、単なる区画ではない。座全体が個別具体的な身体へ触れる入口であり、身体の参与が座全体へ作用し返す最小のインターフェイスである。

空席は、何もない場所ではない。誰かが来る可能性、来なかった誰かの不在、排除された者、待たれている者、交代可能性を保持する。したがって、身体が無いという意味での無と、誰が座るかが本質的に固定されていないという意味での空は異なる。席は埋まっても空は消えない。身体が席に着いた後も、その身体と席の関係は本質的所有へ閉じず、別の位と相へ変容しうる。

席は、座の空を身体の尺度へ局所化する。逆に、身体が席へ即することによって、抽象的な参与可能性は現実の関係へ変わる。この双方向性が席をインターフェイスたらしめる。

2.6 位：暫定的な関係的位置

位は、固定された身分や座標ではない。位とは、身体や行為が席に即した結果として生成される暫定的な関係的位置である。客、主人、鑑賞者、制作者、教師、学生、宿泊者、研究者といった位は、主体があらかじめ所有する属性ではなく、座、席、他者、行為の相互作用から成立する。

席と位は区別されなければならない。席は身体を迎える可能性であり、位はその参与によって現実化した関係である。空席はあっても、対応する位が作動していない場合がある。また、物理的に同じ席でも、参与の仕方が変われば異なる位が生じる。

2.7 無名性：作者から継承への位相転換

無名性は、名前の欠如でも作者の消滅でもない。無名性とは、生成が特定の作者、所有者、起源へ完全には回収されず、他者によって反復・変奏・継承されうる存在様態である。

印が型となり、型が形となり、形が座を開き、席を通じて複数の身体が位を生成するとき、最初の作者の意図だけでは全体を説明できなくなる。生成は作者性を超えて共同体、自然、歴史へ分散する。この作者性の位相転換が無名性である。

無名性は責任の放棄ではない。むしろ、生成を個人の所有へ閉じず、後続者が応答可能な状態に保つ責任である。名は必要であるが、名は生成の終点ではない。

2.8 文化生成：無名の反復と変形

文化生成は、完成した価値体系の保存ではない。複数の世代、身体、環境が型と座へ参与し、その都度異なる位と相を生成しながら、関係構造を継承する過程である。

文化が成立するためには、同一性だけでなく差異が必要である。完全に同じ反復は単なる複製となり、差異だけで連続性がなければ継承は成立しない。文化生成とは、型が差異を受容し、座が新しい席を開き、位相が変化しながらも、生成可能性そのものが持続することである。

3. 系列を貫く条件と作用

3.1 空：構造的非閉鎖性

空は、系列の最初に置かれる原初的な無でも、形の背後にある超越的実体でもない。空とは、印、型、形、座、席、位、名、文化のいずれも固定的な自性によって完結しないという根本条件である。

空があるから印は別の意味へ開かれ、型は変奏され、形は異なる相を現し、座は新しい席を開き、位は交代し、名は再解釈され、文化は生成を継続できる。したがって空は、存在の欠如ではなく、存在生成の構造的非閉鎖性である。

空と無は区別される。無は、ある関係や身体が現在は現前していないことを示す。空は、有と無のいずれも固定的終点にならないことを示す。空席に身体がいないことは無であるが、その席が別の身体と関係へ開かれていることは空である。

3.2 即：現実化を可能にする生成的接続構造

即は、「直ちに」という速度だけを意味しない。また、二つの項を単純に同一化する等号でもない。即とは、差異を保持した複数の位相を、身体、行為、時間、抵抗を通じて生成的に接続し、新たな関係の現実化を可能にする構造である。

即は系列の各移行を作動させる。印は現実へ即することで単なる記号を超え、型は現実条件へ即することで変奏され、形は座へ即することで参与を誘発し、身体は席へ即することで位を生成し、位は他の位へ即することで相を変え、反復は歴史へ即することで文化となる。

即の現実接地には抵抗が含まれる。自己が望む意味と、物質、他者、環境から返される応答は一致しない。この不一致が生成の力を生む。したがって即は調和への即応ではなく、抵抗を消去せず関係生成へ開く接続構造である。

3.3 相と位相

相は単なる外見や主観的印象ではない。相とは、ある位が成立したとき、その位を含む自己・他者・環境の関係全体が現す一時的な構成様態である。

形と相は異なる。形は素材、身体、配置として現れた可感的構成である。相は、その形が特定の座と位において、どのような意味、方向、力、可能性をもつかという関係全体の現れである。同じ建物、椅子、庭、Webサイトでも、参与者の位が変われば相は変わる。

位は関係的位置であり、相はその位置を含む全体の構成様態である。位と相は一方的な因果関係ではない。位が変われば相が変わり、相の変化は既存の位と席を再編する。この相互生成を、本論文は位相と呼ぶ。

ここで位相は、数学的位相の語源的分解ではなく、生成の位相存在論における概念的精密化である。位相とは、関係的位置と関係様態が相互に規定し、接続可能性を形成する構造である。

3.4 是：暫定的現成

是は、生成された関係を永久的な本質として固定する判断ではない。是とは、即によって生じた関係が、特定の座において「これである」として暫定的に成立し、指示・共有・反復可能になる二次的現成作用である。

即だけでは、出来事は生じても、共有・継承されないまま消える可能性がある。是だけでは、現実接地を失った「AはBである」という記号的同一性が固定される。即是とは、現実の接触から生成した関係が、空を失わず一つの位相として成立することである。

是は有とも異なる。有は何かが現前していることを示す。是は、それが何として現れているかを暫定的に定める。身体が部屋に存在することは有であり、その身体が客、教師、制作者として現れることが是に関わる。

3.5 非：固定化を解除する差異化作用

非は無ではなく、単なる反対命題でもない。非とは、是によって成立した関係が、その定義や名によって尽くされないことを示し、固定的同一性から解放する作用である。

非は、恣意的な否定ではなく、現実から返される異議として現れる。制度が「これは正しい」「これは価値である」「この人はこの役割である」と固定したとき、個別具体的な身体、物質、時間、他者がその定義へ納まりきらない。その納まらなさが違和感として経験される。違和感とは、固定された是に対して個別具体的な現実が発する非の感覚である。

非は成立した関係を破壊しない。席を消すのではなく、席を一つの位から解放する。名を消すのではなく、名を本質から解放する。したがって非は、一般抽象化された是を、個別具体的な生成へ戻す力である。

3.6 即・是・非・是名

般若思想、とりわけ『金剛般若経』には、あるものを固定的自性として否定しながら、仮の名として再び成立させる「非・是名」の反復構造がある。生成学はこれを、形式論理上の単純な矛盾としてではなく、異なる限定領域の区別として読む。

関係的現象としてのAは、現実に作用している。しかしそれは、独立した固定的本質としてのAではない。ゆえにAは、特定の関係において暫定的にAと名づけられる。これを生成学的に言い換えれば、即が関係を生成し、是が関係を成立させ、非がその成立を本質化から解放し、是名が共有可能な仮の名を与える。空はこの全過程を開いたままにする。

この構造は無名性と矛盾しない。無名性は名の欠如ではなく、名が作者、所有者、固定的本質へ閉じないことである。是名は文化的伝達を可能にし、非は名への執着を解除し、無名性は生成を後続者へ開く。

4. 線形系列ではなく再帰的生成

4.1 継承方向

印から文化生成への系列は、生成がどのように持続可能になるかを記述する。印の反復可能性が型となり、型の個別具体的現象が形となる。複数の形と実践が参与構造を形成すると座が生じ、座が身体へ開く局所的インターフェイスとして席が成立する。身体が席へ即すると位が生じ、位と相の相互作用が位相を形成する。その生成が特定の作者を超えて継承されると無名性が成立し、反復と変形の持続が文化生成となる。

4.2 創始方向

しかし生成は、完成した座からしか始まらないわけではない。既存の座がない状況では、身体が現実へ即することで一時的な席を設ける。この即席的な参与が反復されると、席と席の関係が型を獲得し、新しい座が形成される。

即席は、粗雑な間に合わせを意味する必要はない。生成学において即席とは、既成制度に先立ち、個別具体的な必要と抵抗から参与可能性を局所的に設けることである。即興が現実との接触から力の方向を立ち上げるなら、即席は、その力が他者を迎え入れられる場所を立ち上げる。

4.3 再帰方向

位と相が変化すると、既存の座も変形する。座の変形は新しい席を開き、新しい席は別の身体と行為を迎え、新しい位相を生成する。したがって、系列は一方向の因果鎖ではなく、後続段階が先行条件を遡及的に再編する再帰的構造である。

文化生成も終点ではない。文化として継承された型と座は、新しい身体にとって再び印の背景となる。新たな印は既存文化へ非を返し、座を変形する。この循環に終対象はない。

5. 仏教思想との比較

5.1 色即是空・空即是色

『般若心経』の「色即是空、空即是色」は、色が消滅してから空になることでも、空という実体が色の背後に存在することでもない。色は固定的自性をもたないがゆえに色として縁起し、空は具体的な色を離れて別に存在するものではない。

生成学では、色を形と完全に同一視しない。色は五蘊の一つとして身体的・物質的形態を指し、形は生成学における可感的構成である。相は、形が関係全体のなかで現す様態である。それでも、具体的形態が固定的本質をもたず、関係的に現象するという構造は、形・相・空の理論と接続する。

生成学的に言えば、色即是空は、形と相がその具体性を失うことなく構造的に非閉鎖であることを示す。空即是色は、非閉鎖性が抽象的な無ではなく、形、身体、席、位、相としてのみ現実化することを示す。

5.2 色と色気——形が空を保持したまま席を開く力

仏教における色（rūpa）と、現代日本語の色気とは、同義でも、教義的・語源的に直接対応する語でもない。色は仏教的分析における身体的・物質的形態を指す。他方、日本語の色気は、色合い、性的魅力、趣や面白み、さらに何かへの関心や欲求までを含む広い意味領域をもつ。したがって、ここで提示する接続は語源説ではなく、生成学的な構造解釈である。

生成学は、色気を完成した身体や対象が所有する属性とは考えない。色気とは、形が他者の注意、接近、参与を誘発する関係的な力である。概念上の分解として、色は可感的な具体的現れを、気はその現れと他者とのあいだに立ち上がる雰囲気、方向性、力を示す。ただし、この分解も歴史的語源を主張するものではない。

色気は、すべてを呈示することからではなく、非閉鎖性から生じる。形が完全に定義され、その関係可能性があらかじめ固定されれば、他者が入る空いた席は失われる。見えている形が見えていない可能性を保持し、是が空を消去せず、非が形を単一の同一性から解放するとき、形は色気を帯びる。この意味で、色気とは、形が空を保持したまま他者へ席を開く関係的な力である。

この概念は、力、興、形の関係も明確にする。興が現実との接触から生じる力の方向的な立ち上がりであるなら、色気は、形の側からその接触を他者へ招く相である。ゆえに色気は系列に加わる新しい段階ではない。形・空・相・力・席を結ぶ派生的な関係現象である。

5.3 空・無・有

空、無、有は同義ではない。有は、関係が現在具体的に現前していることを示す。無は、ある身体や関係が現在は現前していないことを示す。空は、有と無のどちらも固定的本質にならない条件である。

空席には身体がないという無がある。しかし、席、期待、記憶、排除、招待という関係は有る。欠席した人物が不在によって強く現れる場合、無は関係的な相を生成する。この「無いものが在る」という構造は、言語デリバティブ論におけるハルシネーションの存在論とも接続する。存在しない指示対象が、言語上の席と位を与えられることで、現実的な作用をもつからである。

5.4 即非と中道

『金剛般若経』に反復される「非・是名」の構造は、Aを実体化する有の極端と、Aを全面的に消去する無の極端をともに避ける。Aは固定的本質としては非Aであるが、関係的現象として働くため、仮にAと名づけられる。

生成学における非も、この二重の回避を担う。非は是を破壊して無へ落とすのではなく、是を空へ戻す。是名は、空であるものを現実の実践と言語へ暫定的に配置する。この配置が席であり、その関係的位置が位であり、全体の現れが相である。

6. ハイデガーとの比較

6.1 世界内存在と座

ハイデガーの世界内存在は、主体が世界という容器の内部に物理的に置かれていることを意味しない。現存在は、道具、他者、目的、気分、慣習の有意義性連関において、すでに世界へ関与している。世界は対象の総和ではなく、存在者が何として現れるかを可能にする世界性である。

この点で、座は世界性に近い。座は物体の集合ではなく、身体、道具、規則、目的、他者が相互に意味をもちうる参与構造である。席もデカルト的空間内の点ではなく、客として、制作者として、学ぶ者として、応答する者として世界へ関与する局所的可能性である。

6.2 是と「として」構造

ハイデガーにおいて、存在者は中立的な物として先に与えられ、その後で意味を付加されるのではない。道具は実践的連関のなかで、何かのためのものとして現れる。この「として」の構造は、生成学における是と比較できる。

しかし、生成学の是は解釈作用だけではない。身体が席へ即し、物質、他者、時間の抵抗を受けながら関係が成立するとき、存在者は何かとして現れる。是は主観による意味付与ではなく、相互作用から生じる暫定的現成である。

6.3 空と無の非同一性

ハイデガーの無は、仏教の空と同一ではない。ハイデガーの無は、存在者全体の自明性が崩れ、存在の問いが開かれる契機として論じられる。仏教の空は諸法の無自性と縁起に関わる。生成学の空は、存在生成が終局的な位相へ閉じない構造的非閉鎖性である。

三者には、実体的有と単純な無の二項対立を超え、存在者が現れるための開けを問う共通性がある。しかし、それらを同一概念へ還元してはならない。

6.4 生成学による拡張

ハイデガーが、存在は常にすでに世界との関係であることを示すなら、生成学は、その関係がどの座において、どの席を通じ、どのように即し、どの位と相を生み、いかに座そのものを変形するかを記述する。

さらに、『存在と時間』では現存在が世界開示の分析上の優先的位置を占める。生成学は、人間以前性と自己以前性を導入することで、自然、物、建築、人工知能、制度、偶然を、人間の意味付与に従属しない生成参与者として扱う。ここで世界は人間によって一方的に開示されるのではなく、自己・他者・環境の相互作用から生成し直される。

7. 西田・西谷との比較と生成学の独自性

西田幾多郎の場所の論理は、個物を包摂する上位の実体ではなく、有と無、主観と客観が成立する場所を問う。絶対無の場所は、個物の差異を消去する空虚ではなく、個物が個物として自己限定しうる場として構想される。西谷啓治は、西洋的ニヒリティを徹底することで、存在と無の対立を超える空の場を論じた。

これらは生成学の空、座、人間以前性と重要な対話関係をもつ。しかし生成学の独自性は、場所や空を最終的な包括原理として置くことではなく、それらがどのように個別具体的な身体へ局所化されるかを席として記述する点にある。

空は席を通じて身体的参与可能性となる。即はその可能性を現実化する。位と相は局所的接続から生成し、非はその位相を再び開く。したがって生成学は、場所の存在論を、インターフェイス、身体的参与、反復、文化継承の動力学へ展開する。

8. 美学者母の既存理論との統合

8.1 インターフェイス存在論

自己外部化論は、自己を自己以外へ投影する運動が、制度、評価、市場、作品、人工知能によって増幅されることを示した。席は、自己外部化が限界へ達し、自己と自己以外が現実に接触する局所的インターフェイスである。

インターフェイスは滑らかな接続を保証しない。むしろ不一致、遅延、抵抗、誤配を現象させる。この限界において、固定された自己像へ非が返され、自己以前性が新しい位として現前する。

8.2 人間以前性・自己以前性・自己証明

自己証明は、「私は私である」という自己同一的宣言でも、他者や制度から与えられる評価でもない。自己以前性が人間以前性との時間的相互作用から応答を受け、その応答への気づきによって自己として現前する局所的生成である。

本論文の語彙では、自己証明とは、身体が席へ即し、予測できない応答を受けながら位を生成し、その位を含む世界が相として現れる出来事である。是はその現前を暫定的に言語化するが、非と空が自己証明を固定的自己定義へ閉じることを防ぐ。

8.3 言語デリバティブ論

言語デリバティブ空間では、言葉が現実の指示対象から離れ、未来の可能性、評価、期待、物語を先取りして価値を増幅する。是が即から切り離されると、「これは事実である」「これは価値である」という命題が、現実接地なしに自己増殖する。

人工知能のハルシネーションは、この構造を可視化する。言語は存在しない対象へ席を与え、文中の位と相を構成し、「無いものが在る」状態を生成する。問題は虚偽が存在することだけではなく、言語的な是が現実的な即を代替することである。

非は、言語的是を単に否定するファクトチェックではない。指示、身体、時間、物質、責任との再接続を要求し、言語的位相を現実へ戻す作用である。

8.4 評価・証明・価値の力学

評価、証明、価値は、現実を中立的に測るだけではない。それらは、何が「是」であるかを制度的に決定し、人間の行為を特定の席と位へ収束させる力である。評価が反復されると、暫定的な是は一般普遍的な事実として固定され、座は新しい席を開く力を失

う。個別具体的な違和感は、この固定化へ非を返す。非が新しい席を開き、身体がそこへ即すると、制度外の位と相が生成される。この運動が、一般抽象化力から個別具体化力への位相転換であり、『力の生成論』における偶然性の回帰である。

8.5 生活即芸術と作品性

生活即芸術における即は、生活と芸術を概念的に同一化するものではない。生活の身体的・時間的・物質的現実と、芸術という座の型とを差異のまま接続する生成的構造であり、その接続を通じて双方が変形する。作品性は、完成した物が作品であるという是ではなく、ある形が他者の参与を誘発し、新しい席、位、相を生み続ける働きである。作品が作者の意図を超えて反復されるとき、作品性は無名性へ移行し、文化生成の条件となる。

9. 民宿狭山美学校という実践

民宿狭山美学校は、生成学の概念体系を具体的に示す長期的インスタレーションである。建物は単なる容器ではなく、生活、宿泊、教育、制作、鑑賞、研究が相互に切り替わるインターフェイスである。

建物全体は座として働く。客室、食卓、庭、玄関、Web、作品、日常的な行為は、身体を迎える複数の席となる。訪問者が宿泊し、対話し、制作し、見ることによって、客、鑑賞者、共同制作者、研究参加者などの位が生成される。その都度、同じ建物が民宿、学校、作品、生活空間、研究機関という異なる相を現す。

「民宿である」「学校である」「作品である」という是は、名称だけによって成立しない。身体的実践が場所へ即することで暫定的に成立する。また、それぞれの是は他の可能性を排除する固定的本質ではない。「民宿であるが、単なる民宿ではない」という非が、別の席と位相を開く。

この実践において、作者は全体を所有・制御しない。訪問者、時間、建築、自然、偶然、記憶が関係を変形し続ける。したがって民宿狭山美学校は、自己表現としての作品ではなく、印が型と形を経て座を形成し、席と位相を開き、無名の文化へ移行する過程そのものである。

10. 統一命題

本論文の体系は、次の命題として要約できる。

命題1　関係先行命題

存在者は完成した実体として関係へ入るのではなく、関係の生成から存在者として現れる。

命題2　印命題

印は、自己と自己以外の接触が差異として現実へ残る最小の生成契機である。

命題3　型命題

型は、差異を消去せずに反復可能性を保持する非固定的構造である。

命題4　座命題

座は、複数の席、位、型、規則、時間を関係づける共同的生成構造である。

命題5　席命題

席は、座の空を一つの身体へ局所化し、身体の行為を座全体へ作用させる最小のインターフェイスである。

命題6　即命題

即は、差異ある位相を現実の抵抗下で接続し、新しい関係の現実化を可能にする生成的構造である。

命題7　位相命題

位は接続から生じる関係的位置であり、相はその位を含む関係全体の構成様態である。両者の相互生成が位相を形成する。

命題8　是命題

是は、即によって生成された関係を、空を失わず一つの位相として暫定的に現成させる二次的作用である。

命題9　非命題

非は、是によって成立した位相を消去せず、固定的同一性から解放して新しい生成へ開く作用である。

命題10　無名性命題

生成が特定の作者・所有者・起源へ還元不能となり、他者による反復と変奏へ開かれたとき、無名性が成立する。

命題11　文化生成命題

文化とは、固定された内容の保存ではなく、無名化された型と座が新しい席と位相を開き続ける再帰的生成である。

命題12　構造的非閉鎖命題

空は系列の一項ではなく、いかなる印、型、形、座、席、位、名、文化も終局的に閉じないことを保証する根本条件である。

系　色気命題

形が空を保持し、他者の参与可能性を開くとき、色気は関係的な力として生じる。色気は形の内部に閉じた属性ではなく、形・相・他者・席のあいだに生じる出来事である。

11. 理論的意義と限界

本論文の第一の意義は、これまで座の内部に曖昧に含まれていた個別具体的な参与可能性を、席として分離した点にある。これにより、座は一つの空位ではなく、複数の席と空位を関係づける構造として精密化された。

第二の意義は、系列と作用を区別した点にある。即、空、是、非を新たな段階として追加すると、生成学は概念の列挙へ陥る。本論文は、それらを異なる論理階層へ配置し、空を根本条件、即を生成的接続構造、是を二次的現成作用、非を再開放作用として整理した。

第三の意義は、仏教の色空論、金剛経の非・是名、ハイデガーの世界内存在、西田の場所、西谷の空を比較しつつ、それらを同一化しなかった点にある。生成学の独自性は、空を身体的参与へ局所化する席と、参与によって座そのものが変形する再帰構造にある。

一方で、本論文は語源研究、仏典文献学、数学的位相論、ハイデガー研究、日本中世史の専門研究を代替するものではない。また、是と非の理論は、現段階では生成学の二次的作用として提示されており、独立した公理概念として採用されていない。今後は、具体的事例の比較、位相変換の記述方法、制度的是が固定化される条件、非が単なる反対運動へ堕する条件を検討する必要がある。

結論

本論文は、美学者母の生成学における存在生成と文化継承の体系を、次の系列として統一した。

印 → 型 → 形 → 座 → 席 → 位 → 無名性 → 文化生成

この系列において、印は差異の最小の現実化、型は反復可能性の保持、形は型の個別具体的現象、座は参与を組織する共同的構造、席は座の空を身体へ局所化するインターフェイス、位は身体が席へ即することで生成される関係的位置、無名性は生成が作者性を超えて継承可能になる存在様態、文化生成はその反復と変形が持続する過程である。

しかし、生成はこの系列だけでは作動しない。空は全体を固定的本質へ閉じさせない。即は各段階を現実へ接地させる。相は位とともに位相を形成する。是は即によって生じた関係を暫定的に現成させる。非はその是を消去せず、本質化から解放する。

この構造において色気は、形が空を保持することで他者の注意と参与へ席を開く、派生的だが重要な現象を指す。それは系列の追加段階ではなく、非閉鎖性が可感的な関係力として現れたものである。

したがって、是を「座 -> 席 -> 即 -> 是 -> 位 -> 相」という新しい段階として配置してはならない。即は各段階を貫く生成的接続構造であり、是は即から位相への移行に伴う二次的現成作用である。非はその現成を再び空へ開く。

本論文の最終命題は、次の通りである。

空を保持する座が席を開き、身体が現実に即することで位が生成される。位を含む関係全体は相として現れ、是によって暫定的に成立する。しかし、その是は非によって固定化を解除され、再び空へ開かれる。この再帰が印を型へ、形を座へ、位を無名性へ、無名性を文化生成へ移行させる。

存在とは、すでに在るものが席を占めることではない。存在とは、空いた席へ即することで位と相を生成し、その座を変形しながら、自己を超えて継承されることである。

参考文献

Works by Tomokazu Tanaka (bigakusha-haha)

Tanaka, Tomokazu (bigakusha-haha). Axioms of Generative Topological Ontology: A Foundational Theory of Existential Generation. Research Monograph, Version 1.0, 2026.

Tanaka, Tomokazu (bigakusha-haha). The Limits of Self-Externalization and Existential Generation: Interface Ontology in Generative Topological Ontology. Research Memorandum, Version 1.0, 2026.

Tanaka, Tomokazu (bigakusha-haha). Pre-Humanity and Self-Precedence: An Ontology of Self-Verification in Generative Topological Ontology. Research Memorandum, 2026.

Tanaka, Tomokazu (bigakusha-haha). The Theory of Language Derivatives: Inverse Problem Art and Leverage Structures in Artificial Intelligence Hallucination. Research Memorandum, Version 1.0, 2026.

Tanaka, Tomokazu (bigakusha-haha). The Dynamics of Evaluation, Proof, and Value: Leverage Structures and Particular-Concrete Necessity in Generative Topological Ontology. Research Memorandum, 2026.

Tanaka, Tomokazu (bigakusha-haha). Generative Theory of Force: The Topological Transformation from Necessity to Contingency. Research Memorandum, 2026.

Tanaka, Tomokazu (bigakusha-haha). Ontology of Life-as-Art: A Structural Comparison of the Bauhaus, Russian Constructivism, and Japanese Buddhism from Generative Topological Ontology. Research Memorandum, 2026.

Tanaka, Tomokazu (bigakusha-haha). Ontology of Kata: Mark, Namelessness, and the Foundations of Cultural Generation in Generative Topological Ontology. Research Memorandum, Version 1.0, 2026.

Tanaka, Tomokazu (bigakusha-haha). Ontology of Namelessness: Workhood, Sacredness, and Cultural Generation in Generative Topological Ontology. Research Memorandum, Version 1.0, 2026.

Philosophy, Buddhist Studies, and History

Conze, Edward, trans. Buddhist Wisdom Books: Containing The Diamond Sutra and The Heart Sutra. London: George Allen & Unwin, 1958.

Heidegger, Martin. Being and Time. Translated by John Macquarrie and Edward Robinson. Oxford: Blackwell, 1962.

Heidegger, Martin. “What Is Metaphysics?” In Pathmarks, edited by William McNeill, 82-96. Cambridge: Cambridge University Press, 1998.

Nagarjuna. The Fundamental Wisdom of the Middle Way: Nagarjuna’s Mulamadhyamakakarika. Translation and commentary by Jay L. Garfield. New York: Oxford University Press, 1995.

Nishida, Kitaro. Last Writings: Nothingness and the Religious Worldview. Translated by David A. Dilworth. Honolulu: University of Hawai‘i Press, 1987.

Nishitani, Keiji. Religion and Nothingness. Translated by Jan Van Bragt. Berkeley: University of California Press, 1982.

Yamamura, Kozo. “The Development of Za in Medieval Japan.” Business History Review 47, no. 4 (1973): 438-465.

Yusa, Michiko. “D. T. Suzuki and the ‘Logic of Sokuhi,’ or the ‘Logic of Prajnaparamita.’” In The Dao Companion to Japanese Buddhist Philosophy, 589-616. Cham: Springer, 2019.

Shogakukan. “Iroke (色気).” Seisenban Nihon Kokugo Daijiten, via Kotobank. Accessed August 18, 2026. https://kotobank.jp/word/%E8%89%B2%E6%B0%97-436712.

U Tokyo Liberal Arts Program. “Bukkyō shisō ni miru ‘iro’ (仏教思想にみる〈色〉).” 2016. https://www.lap.c.u-tokyo.ac.jp/ja/nanjing_lectures/color/160305/.

方法論的声明

——研究覚書の公開に関する方法論的声明——

本稿は、生成の位相存在論（Generative Topological Ontology）の継続的な研究過程における研究覚書（Research Memorandum）として公開するものである。
本稿に示される概念、定義、仮説および議論は、執筆および公開の時点における理論的到達点を記録したものであり、最終的に確定された理論を意味するものではない。これらは、今後の研究、芸術実践、現実との相互作用、学術的対話および査読を通して、加筆、修正、再定義または再構成される可能性がある。
本研究は、完成した理論のみを研究成果とみなすのではなく、概念が生まれ、相互に接続され、変容し、理論として統合されていく過程そのものを重要な研究対象として位置づける。したがって、本稿は未完成な草稿というよりも、理論生成の特定の時点を記録した一つの位相として理解されるべきである。
研究覚書の公開は、完成した理論を先行して提示することを目的とするものではない。それは、思考と実践の生成過程を記録し、後の研究による検証および再構成を可能にするとともに、異なる立場との学術的・芸術的対話へ開くための方法である。
本稿の内容が、後に査読論文、学術書またはその他の正式な研究成果として公表される場合、その完成版は、本研究覚書とは異なる固定された文書として明示される。
本稿を引用または参照する場合は、題名、著者名に加えて、版番号（Version）および最終更新日を併記されたい。異なる版の間には、概念、定義および論証上の相違が含まれる場合がある。
本研究覚書は最終的な結論ではない。それは、生成の位相存在論が形成され続ける過程における一つの到達点であり、同時に、さらなる生成へ開かれたインターフェイスである。